

長年にわたり町内外で展覧会やアートプロジェクトなどに携わってきた、つなぎ美術館の主幹・学芸員である楠本智郎さんに津奈木町とアートについてお話をうかがおう。

実は津奈木町とアートとの関わりは美術館ができる前までさかのぼるという。「1984年に当時の町長が掲げた『緑と彫刻のある町づくり』によつて、町内各所に彫刻作品が設置されました。津奈木町も水俣市と同様、水俣病の被害を受けた歴史があり、傷ついた住民の心を癒やそうという狙いがありました。その後も町役場横の集会場で展覧会を行うなど、アートは津奈木町にとって欠かせないものとして受け継がれてきて、2001年に芸術・文化活動の拠点として、当館がオープンしました」。

当初は境野一之氏をはじめとする地元熊本県ゆかりの作家の作品の展示などが中心だった。そこで、楠本さんは地元の人々にもっとアートに興味を持つてもらいたいと、津奈木町の有志の人々に声をかけて、話し合いを重ねたという。「そして実現したのが住民参画型アートプロジェクト

クトです。初開催は2008年でした。現代美術家の岡山直之さんを招いて行つたのは、『津奈木ハートマン計画』と題したもの。岡山さんが1年をかけて通いながらさまざまなアートの可能性を見せてくれたことで、たくさんの住民が参加してくれ、評判は上々でした（P36参照）。「アートには興味がない」と言っていたのに、当日『冷やかしに来たよ』と会場に来てくださった人も。手ごたえを感じましたね」。

翌年から毎年アートイベントが開催されるようになり、年を追うごとに町にアートが根付いていった。「2014年からは、アーティストが数ヵ月津奈木町に暮らしながら制作と展示を行う『アーティストインレジデンス（AIR）』もスタートしました。ワークショップ体験や制作風景を見るだけでなく、一緒に食事やお酒を楽しむといった機会もあり、さ

## アーティストと住民が繋がることが、既に新しいアートかも知れない



つなぎ美術館  
主幹・学芸員  
楠本 智郎さん



# 特集2 つなぎ 津奈木町

「緑と彫刻のある町づくり」。これは昭和の終わりに熊本県津奈木町が掲げたまちづくりのテーマだ。そのフレーズ通り、町内の至るところで人物や幾何学などをモチーフにした多様な彫刻に出会うことができる。また、町のシンボルである奇岩「重盤岩」の麓にはつなぎ美術館があり、この場所を中心に長年にわたり住民参画型のアートイベントが開催してきた。今年は美術館開館20周年という節目の年。さまざまなアートイベントが予定されており、その一つが世界的に活躍する現代美術家・柳幸典氏との大がかりなプロジェクトだ。

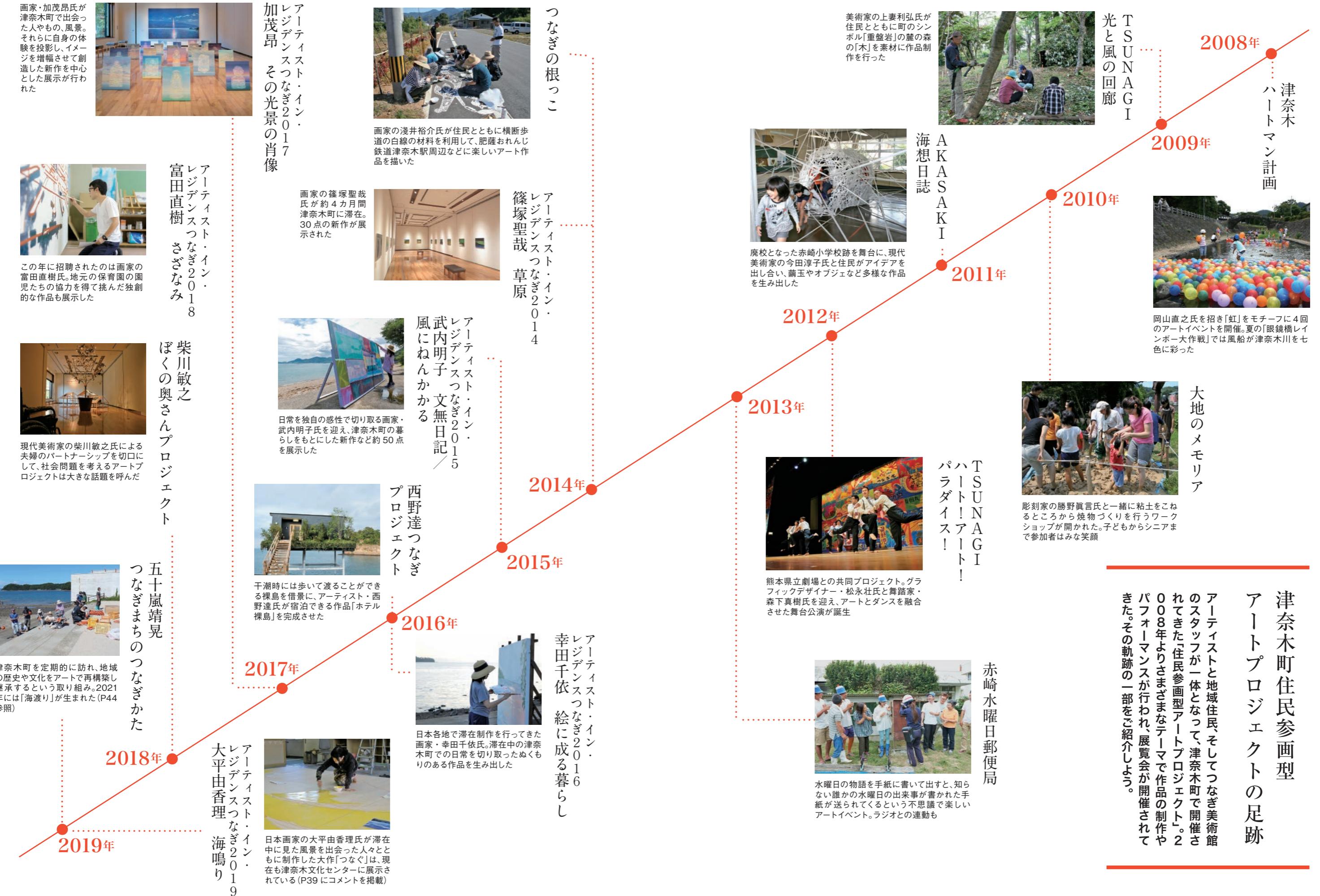
一過性のものではなく長い時間をかけて住民たちが身近にアートを感じ、接することができる町となった津奈木町の住民参画型アートプロジェクト。これまでの足跡を辿りながら、津奈木町をアートで旅してみよう。



■つなぎ美術館  
熊本県葦北郡津奈木町岩城 494  
☎ 0966・61・2222  
営 10:00～17:00(入館は 16:30 まで)  
休 水曜(祝日の場合は翌日)

## 津奈木町住民参画型アートプロジェクトの足跡

アーティストと地域住民、そしてつなぎ美術館のスタッフが一体となって、津奈木町で開催されてきた「住民参画型アートプロジェクト」。2008年よりさまざまなテーマで作品の制作やパフォーマンスが行われ、展覧会が開催された。その軌跡の一部をご紹介しよう。



約4,400人の人口のうち「住民参画型アートプロジェクト」関わったのは、なんと延べ数百人にものぼるという。実行委員として運営に携わったり、作品やアートイベントに参加したりと、住民の関わり方はさまざまだ。アートと町との関係について、津奈木町の人々に話を聞いてみよう。

## ＼次はどんな出会いがあるか楽しみです／



津奈木町陶芸教室  
斎藤 由佳さん

2010年に開催された津奈木町の土を使い、もみ殻を燃料に野焼きで焼物を作る「大地のメモリア」に実行委員として参加しました。イベントの運営とともにワークショップにも加わり、土を踏んで粘土づくりから体験。素焼きで野焼きなので土器に近く、参加者が思い思いの作品を作りました。後に参加者の作品を集合させて展示したのですが、作品が完成するまでの工程を知っているので感動もひとしおですね。ちなみに私はクジラを作ったんですよ。

その後、2015年には滞在制作をされた画家の武内明子さんと一緒に陶芸を行いました。アーティストを目の前に一緒に創作できたのが楽しくて貴重な体験でしたね。ほかにも何人のアーティストが津奈木町を訪れました。現在、移住してきている大平由香理さんとも陶芸をしています。みなさんそれぞれ魅力的で自由の感性を持つ人ばかり。次にどんなアーティストが津奈木町に来てくれるのか楽しみです。

2010年に開催された津奈木町の土を使い、もみ殻を燃料に野焼きで焼物を作る「大地のメモリア」に実行委員として参加しました。イベントの運営とともにワークショップにも加わり、土を踏んで粘土づくりから体験。素焼きで野焼きなので土器に近く、参加者が思い思いの作品を作りました。後に参加者の作品を集合させて展示したのですが、作品が完成するまでの工程を知っているので感動もひとしおですね。ちなみに私はクジラを作ったんですよ。

その後、2015年には滞在制作をされた画家の武内明子さんと一緒に陶芸を行いました。アーティストを目の前に一緒に創作できたのが楽しくて貴重な体験でしたね。ほかにも何人のアーティストが津奈木町を訪れました。現在、移住してきている大平由香理さんとも陶芸をしています。みなさんそれぞれ魅力的で自由の感性を持つ人ばかり。次にどんなアーティストが津奈木町に来てくれるのか楽しみです。

## ＼地元の魅力を作品で再発見することも／



海の見えるパン工房  
柳迫 秀代さん

初開催であった2008年には子どもと一緒にパフォーマンスに参加しました。橋の上から色とりどりの風船を投げて虹のアーチを完成させたんです。もともと絵や彫刻などを観るのは好きでしたが、多くの人が加わることで完成するアート作品というのも面白いなと思いましたね。その後、実行委員会に加わり、ワークショップの準備や運営などに携わることに。2012年には舞踊家の森下真樹さんを招聘。津奈木町の男性も加わった「オヤジダンサーズ」を結成して、漁師町らしく大漁旗の前で圧巻のパフォーマンスを披露。楽しいアートでした（笑）。長期滞在するアーティストは津奈木町をテーマに作品を制作するのですが、「あの場所をこんな風に描くんだ」と普段見ている風景に新しい発見があることも。自分たちの住んでいる町がアーティストのフィルターを通して違う輝きを持つことに気が付いて、何だか嬉しくなりますね。

## ＼暮らすことで生まれる作品もありますね／



画家・津奈木町地域おこし協力隊  
大平 由香理さん



「津奈木町の日常をアートで表現したい」と大平さん。その1つとして取り組んでいるのが家庭料理のスケッチだ

津奈木町との出会いは、つなぎ美術館が2014年から2019年にかけて毎年1人の画家を招いて実施した滞在制作プログラムが縁でした。これまで10年近く全国各地での滞在制作や海外でも作品発表を続けてきましたが、津奈木町のアートの取り組みは世界的に見ても他に類をみない活動が多くあります。国際的な芸術祭や一般的な美術館では入館者数や経済効果が評価基軸となることがあります。これまでに見ても他に類をみない活動があります。コロナ禍を経て、今までのように何万人来場だから盛況、というような考え方は通用しなくなってくると思います。招聘作家として町に滞在する中で、津奈木町のアートの試みは今後より一層大切になっていく確信があり、アートによるまちづくりに関して初の移住者となることに決めました。作品を通して町の魅力を伝える担い手の1人になりたいと思います。

## ＼住民のアイデアから生まれる作品もあるんです／

「つなぎ美術館」が開館してから美術館をどのように活用するかを考えるチームが結成され、町の活性化委員会の一員であつた私も参加することになりました。作品を展示して「来館者を待つ」だけではなく、「住民参画型」にすることで美術館が地元の財産であるという思いに繋がったんです。ですから、津奈木町を訪れたアーティストは「町民が主役ですよ」と言ってくれる人が多い。テーマだけを投げて、住民がそれに応えるようなスタイルですね。地元の人々は自分が作品に関わることでアートやアーティストを身近な存在に感じてくれるようになつたと思います。2008年に開催された「津奈木川を風船でいっぱいにしたい」という住民の発想が発端になつたもの。眼鏡橋の上から数百のカラフルな風船を放つて七色の虹を架けました。



津奈木町議会議員  
宮嶋 弘行さん



アーティストインタビュー

やなぎ ゆき のり 幸典 さん

「つなぎ美術館」開館20周年  
記念事業作品を手掛けたのは現代美術家として世界的に活躍している柳幸典さんだ。準備から数えると約3年をかけて取り組んだという柳幸典さんに津奈木町とアート、そして作品についてお話をいただこう。



「石靈の森」。森の中に配置された巨大な石の中から、住民たちが読み上げるさまざまな地域の物語が流れてくる

最初に津奈木町を訪れたのは2019年だったと記憶しています。私は福岡県出身とすることもあり、「見慣れた九州の小さな田舎町だな」というくらいの第一印象でした。しかし、この小さな町がアートを用いて地域を盛り上げようとしているというのは知つており、訪れる度に参加する行政や住民の人々の情熱と、小さな町だからこそその意思決定の速さには驚かされましたね。

「住民とともに作品を完成させる」というのが私に課せられた大前提。津奈木町の人々と一緒に表現をする際に何をテーマに据えるかは、実際に町を訪れて風景を見て、住民の方々とお会いしてから考えようと思つていました。

津奈木町は水俣市に隣接しており、この町も水俣病の被害があつた場所。しかし、地元の人々のなかには水俣病に傷つけられた辛い過去を語りたがらない人も少なくありません。そのため石牟礼道子（＊1）やユージン・スミス（＊2）が伝えてきた地域の負の歴史が忘れ去られようとしていました。

難しい問題ではありますが、歴史は誇るべきものばかりではありません。目をそむけたくない負の話題もある。しかし、いずれにも真正面から向き合い、清濁合わせて次世代に伝えることで正しい文化が育まれると思うのです。

実は私は岡山県の大島という場所に美術館を開設しています。その場所



1959年福岡県生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科卒業後、1990年アメリカ・イエール大学大学院美術学部彫刻科で学ぶ。2005～15年広島市立大学芸術学部准教授。第45回ヴェネツィア・ビエンナーレアベルト部門受賞。東京都現代美術館、ニューヨーク近代美術館、テート・ギャラリーなど30か所以上に作品が収蔵されている



「つなぎ美術館」に展示されている模型の説明を行う柳さん

所はかつて銅の精錬所があり日本の産業を支えていましたが、精錬所の閉鎖後は産業廃棄物が持ち込まれそれになつたり…。目を背けられ忘れられようとした地域が紡いできた歴史。それをアートという手段を用いて、多くの人々に知つてもらうことを目的に10年がかりで美術館を開き、アートを通じて恒久的に地域の歴史に触れられる場所にしたのです。

そんな私が津奈木町の赤崎という場所で出合ったのは美しくきらめく海でした。しかし、ここもかつて人間の傲慢によって暴力にさらされた歴史を持つ場所。この海を見て、津奈木町の歩んできた正と負の道程を作品の根底に据えようと考えました。海のそばに建つ旧赤崎小学校跡の歴史を語る場所にしたのです。

プールに「入魂の宿」という作品を制作。眼前の海と同じ視点になつて世界を眺められる場所で、周囲には津奈木町の自然を表す地元の方々が選定した植栽を置いています。海の辛い過去と美しい今が交わる場所です。

一方、「石靈の森」という作品は捨てられた大きな石を用いたもの。石の中からは住民の方が読み上げる石の朗読が流れます。津奈木町ならではの社会的なメッセージとアートとの融合を私なりに形にしました。私が津奈木町で見聞きしたものと、津奈木町の方々の思いが一体になつた、この町でしかできない表現です。



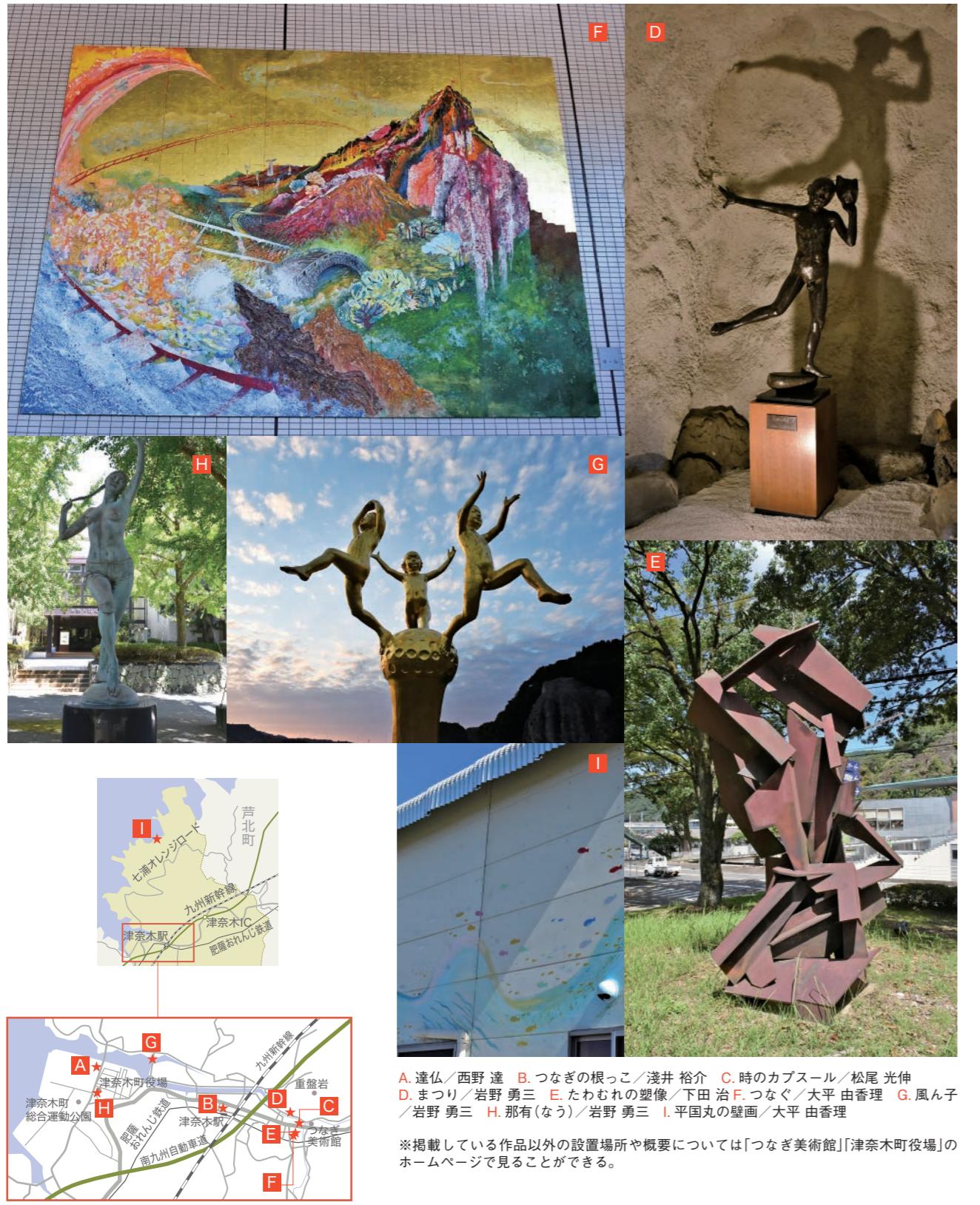
柳さんの3年以上にわたる制作過程や、参加したシンポジウムなども美術館にパネルとして展示されている



「入魂の宿」。廃校となった旧赤崎小学校のプールに設置された体験型の作品。中央まで伸びるスロープを降りると、海と同じ視点になって世界を見渡せる

\*1 石牟礼道子（1927-2018）熊本県出身の作家・詩人。水俣で育ち、後に水俣病患者をテーマにした『苦海淨土』を執筆し、大きな反響を呼んだ。文筆だけでなく社会活動家としても活躍した。  
\*2 ユージン・スミス（1918-1978）アメリカの写真家。第二次世界大戦では戦争写真家として活躍。晩年に水俣地区を訪れ、水俣病患者や地域の日常生活を写真に収めた多くの作品を残している

津奈木町の各所では、さまざまなモチーフや大きさの彫刻や、これまで十数年の住民参画型アートプロジェクト、アーティストインレジデンスの成果として誕生した作品に出会うことができる。そのほんの一部を紹介しよう。



### 柳幸典つなぎプロジェクト 2019-2021

◎開催中～11月23日(火・祝)

つなぎ美術館開館20周年を記念して2019年に始まった「柳幸典つなぎプロジェクト」の3年間の軌跡を写真、映像、模型などの資料によって紹介。津奈木町内の屋外で開催されている「柳幸典つなぎプロジェクト成果展2021 Beyond the Epilogue」との連動企画。

料 無料



### ユージン・スミスとアイリーン・スミスが見た MINAMATA

◎開催中～11月23日(火・祝)

水俣病を3年間にわたり撮り続けた20世紀を代表するアメリカの写真家、ユージン・スミスと妻のアイリーン・スミス。1975年に刊行された写真集『MINAMATA』は世界中で大きな反響を呼んだ。本展では写真集『MINAMATA』に収められている写真のほか、地域の日常を撮った未発表の写真などをアイリーンの監修のもと新たにプリント。助手であった石川武志が捉えた2人の写真とともに展示中。

料 一般／300円 高大生／200円 小中生／100円



「つなぎ美術館」では  
20周年にふさわしい企画展を開催中。



### ドキュメンツ 忘れえぬ記憶 生まれくる風景

長野良市 豊永和明 長野梢人

◎12月4日(土)～2022年2月14日(月)

2016年の熊本地震と、2020年の豪雨によって甚大な被害を受けた熊本県。被災当時とその後の様子を熊本ゆかりの3人の写真家による写真と映像で展示。

料 一般／300円 高大生／200円 小中生／100円

■つなぎ美術館  
☎0966・61・2222  
10:00～17:00(入館は16:30まで) 休 水曜(祝日の場合は翌日)  
※屋外展示物についての詳細も上記連絡先にて対応



◎津奈木町へのアクセス

[福岡方面から]

車で約3時間

九州自動車道を利用し、鳥栖JCTを熊本方面へ。津奈木ICを下車し、国道3号線を経由して水俣方面へ10分ほどで市街地に。

電車で約1時間30分

JR博多駅より九州新幹線を利用。JR新水俣駅で「肥薩おれんじ鉄道」に乗り換え、津奈木駅下車。

### 【津奈木町の観光については】

津奈木町政策企画課 ☎0966・78・3114

取材協力：水俣・芦北観光応援社(熊本県芦北地域振興局内)



### 柳幸典つなぎプロジェクト成果展 2021 Beyond the Epilogue

◎開催中～11月23日(火・祝)

柳幸典氏が3年に及ぶ地域との対話から生み出した大規模な屋外作品。水俣市ゆかりの文筆家・石丸礼道子の文学に着想を得て制作された作品であり、正義と葛藤を抱える社会に存在する真実を読み解くことを見るものに伝える。つなぎ美術館で開催されている「柳幸典つなぎプロジェクト2019-2021」と併せて鑑賞することをおすすめしたい。

「石靈の森」  
所 津奈木町役場(熊本県葦北郡津奈木町大字小津奈木2123)そば  
時 10:00～17:00(観賞用のタイマーの作動時間)  
料 無料



「石靈の森」

「入魂の宿」  
所 旧赤崎小学校(熊本県葦北郡津奈木町福浜165)  
※2022年春に公開予定



「入魂の宿」(完成イメージ図)

### 海渡り 五十嵐靖晃

◎開催中～10月29日(金)

津奈木町の裸島に伝わる弁天祭りを住民とともにアートの力で再構築。無数の糸が島と陸を繋ぎ、伝統の祭りを後世に受け継ぐことを目指す新しいかたちのアート作品。10月30日(土)には「糸あげ」が行われ、翌日の31日(日)に「弁天様のお祭り」が開催される。

所 旧赤崎小学校付近(熊本県葦北郡津奈木町福浜165)  
時 隨時  
10月30日(土)「糸あげ」 9:00～  
10月31日(日)「弁天様のお祭り」 11:00～

